



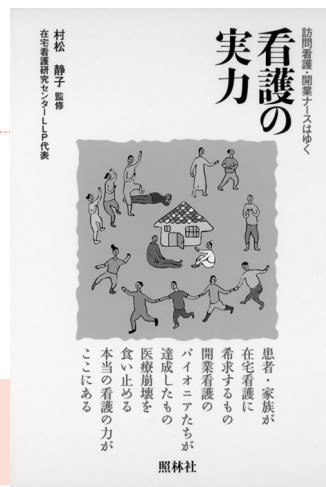
看護師が医師から 自立するための訴え

[評者] 田沼祥子 書籍編集者

看護の実力 訪問看護・開業ナースはゆく

村松静子監修

定価 1785 円(本体 1700 円+税 5%) 照林社 03-5689-7377



●「看護」と「看護師」という言葉

今から三十年たらず前まで、病人の看護は、看護婦だけの仕事ではありませんでした。病院や医院以外ではほとんどすべて、患者の家族または家事使用人(お手伝いさん)の仕事で、それらの仕事は「看護」よりは「看病」と呼ばれました。ただし当時まで、中流以上の家庭では、稀に自分の家の家事(時には病人の看病を含む)のために、家政婦会や派出婦会というものから人手を派遣してもらうこともありました。

なお、戦前には看護婦ばかりか看護兵と呼ばれる人々もいましたが、「看護師」という言葉は戦後も長らくありませんでした。さらに、「看護」という言葉のほかに「介抱」という言葉はありましたが、「介護」という言葉はありませんでした。

●「開業ナース」の育成

本書の監修者の村松さんは、そういう時代の末期に「開業ナース」という新型の職業人を育成する事業を日本で最初に始めた人です。研修教育を実施する事業は「在宅看護研究センター」という名前でした。医師の場合、病院等の勤務医ではない「開業医」という言葉があります。同様に、

「開業ナース」という言葉は、看護師のうち医師(勤務医や開業医)の下で勤務する看護師ではなく、医師と連携はするが医師に従属はしない看護活動(通常は訪問看護)を業とする「開業看護師」を指します。

●本書の組み立て

本書には、合計十八名の方々(すべて女性)が登場します。上記の研修教育を受け、現在は同センターや訪問看護ステーション、病院や介護施設などで、看護や看護教育などに従事している看護師さん十三名と村松さん自身、およびこの事業に協力した女医、弁護士、事務職員、この事業で訪問看護を受けた患者の家族などです。彼女らが各自の実体験について述べた手記が収録されており、末尾に監修者による「ナースの開業マニュアル」が付加されています。

●評者の読後感

評者の夫は、最初はパーキンソン病と診断されたものの、もっと重い進行性の神経難病にかかっていました。介護保険制度が始まる直前までの十三年間、評者はその夫を最後の数か月前まで在宅介護した経験も持ちます(看病の最初の数年までは出

版社勤務を続け、定年退職しました)。

その立場から私は、ナースの開業を試みた方々が経営面で介護保険制度をどんな仕方でも利用してきたのかに深い関心を持ちましたが、本書はそれには触れられていませんでした。

その代わり、本書の執筆者のなかで看護師の資格と履歴をもつ方々のうちの何人かの手記に生き生きと描かれていたものがあります。それは、自分の夫とか実母とか妹という身近な人の死に至る重病の看護・介護に取り組むことによって初めて、看護や介護というのは、いわばその活動を与える側と受ける側との相互的な思いやりによって深く支えられるものだ気付いたという話です。

このことは、職業として看護や介護に関与する医師やケアマネジャーやヘルパーにとっても、福祉行政に携わる公務員にとっても、深く注目すべきことだと思います。

●評者プロフィール

1928 年鎌倉市生まれ(81 歳)。1948 年、岩波書店入社。『育児の百科』『岩波科学の本』などを企画編集。1987 年、夫の肇氏に病の兆候があらわれ、以来 13 年間、家族と在宅介護に取り組む。現在も書籍編集に携わる。